

メディカルラボの挑戦

取材・文 清丸恵三郎

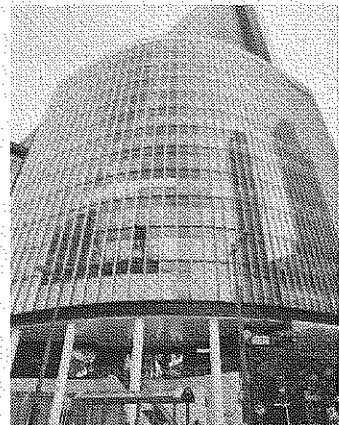
すべての受験生を最短距離で医学部へ！

入校時、合格にはほど遠いレベルの学力しかなかったが、勉強意欲を掻き立たせて医学部へ。准看護師養成の専門学校に進んだが、やはり親のあとを継いで医師になろうと一念発起した女生徒を後押し、難関突破を可能に。――さまざまな理由から医学部を目指す受験生の夢を叶えてくれる、そんな予備校がある。大都市を中心に、全国16カ所に校舎を展開するメディカルラボである。予備校冬の時代に躍進する同校の秘密を探る。

音楽の世界からの転身

鈴木大次郎さん（32歳）は、愛知県にある藤田保健衛生大学医学部の六年生。二月の医師国家試験に合格したら、「地域医療分野に進むつもり。これからは道草を食わず最短距離を行きたい」と熱く思いを語る。

実は鈴木さんは20歳代半ばまで全く医学とは関係ない世界にいた。音楽の世界で仕事をしたいと高校を中途退学。高卒資格は通信制高校で得た。上京して録音スタジオで働いて数年、三つの事件が相前後して起きた。まず交通事



メディカルラボ名古屋校舎

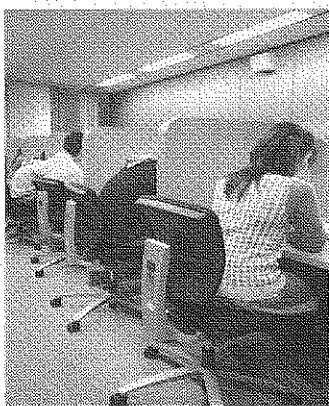
故を起こした友人が自殺したのだ。「自分に医学知識があれば、適切なアドバイスをして上げられたのに」と後悔の念にさいなまれた。折もおり名古屋で耳鼻科を開業していた母方の祖母が倒れ、直後に父親も病気に。

「名古屋に帰って、医者になれ」と言われているように思われ帰郷すると、「孫の誰かがあとを継いでくれるのでは」と、祖母が学資を積み立てていてくれた。祖母は三ヵ月後に亡くなった。メディカルラボに入り、受験勉強に本腰を入れ始める。1対1の個別授業と苦手の英語をはじめ、各科目の実力を引き上げてもらった。そ

の年は二次合格が一枚のみ。しかし手ごたえを感じた。翌年からは藤田保健衛生大学に絞って勉強、五校で二次合格をもらい、志望どおり藤田に進んだ。「先生方は親身になって相談に乗ってくれたし、毎日の宿題をきちんとやるだけで自分に実力が付いていくのが分かった」と鈴木さん。メディカルラボが医学部合格への道を開いてくれたと言っているのである。

母親の後姿に後押しされて

また高校生と言っても通りそうな松岡枝里香さん（21歳）は、昨年四月に埼玉医科大学医学部に入学したばかり。母親が眼科の開業医だった関係で、医



メディカルラボの自習室。

療関係の仕事に就きたいと思っていたが、「医者になるには勉強もしいないといけないし、お金もかかるし……」と断念。地元埼玉の准看護師を養成する学校に入った。午前中は母親の病院を手伝い、午後からは授業。身近で母親の仕事をしている内に、患者と喜怒哀楽を共にする姿に「私も医師になりたい」と強く思うようになった。母親に話すと、「無理に医師にならなくてもいいわよ」と言っていたのに、嬉しそうだった。

すぐにメディカルラボさいたま校に入学。高校卒業から二ヵ月目のことだ。同校を選んだのは、徹底した個別授業が自分に向いていると判断したからだ。加えて「面談した先生の受験に対する考え方が、母親の方針とフィットしたので、その先生に担任になってもいい

母がすすめる医学部志向

都内の有名進学高校の校長によれば、「最近の学校説明会では、東京大学よりは医学部へ何人入ったかが親御さんの関心の中心です」という。それほど受験生本人はもちろん、父母のあいだ